

◆ヒトラーによる将軍たちの懐柔

文=守屋 純

ハインツ・ グデーリアン もうひとつの素顔

機甲戦の始祖として知られるグデーリアンは
「清廉潔白なドイツ軍」の象徴でもある
だが、最新の研究から浮かぶ新たな疑問……
歴史に埋没していた事実を再検証する!

【独り歩きする歴史上のイメージ】

歴史は、それまでの人間の行動を後世になつてから再構成してでき上がるため、どうしても史実とはかけ離れた「歴史イメージ」が独り歩きしてしまう。たとえば、醜男だったという源義経はいつの間にか色白の貴公子となり、領民から慕われる名君だった吉良上野介は憎むべき賄賂政治家にされてしま

い、それが今では一般の「常識」あるいは「通念」になっている。

そして、現代の事件であるはずの第二次世界大戦とドイツ国防軍についても、すでに史実とは異なるイメージが横行している。そのイメージとは「清廉潔白なドイツ国防軍」というものである。

この場合の「清廉潔白」という言葉には二重の意味がある。その第一は、

ハインツ・グデーリアンは第二次大戦を代表するドイツ軍人であり、近年、彼に対する研究が盛んに行われている。

Heinz Guderian

ドイツ国防軍は戦時中も断じて国際法違反の残虐行為に加担しなかった、ましてやナチスによるユダヤ人虐殺であるホロコーストとはまったく無関係だった、とするものである。しかしこの点については、戦後に強い異議の声があがり、国防軍のナチス犯罪への加担を追求する動きは今でも止むことはない。

ここで問題にするのは、「清廉潔白なドイツ国防軍」というイメージのもつ第二の意味についてである。それは、「賄賂や不正利得などのナチスの腐敗とは全く無縁の国防軍」というものである。要するに、国防軍軍人は金で手を汚していなかった、ヒトラーからの買収の誘いも断じてはねつけた、ということである。この国防軍イメージは今でもきわめて有力で、ドイツ国防軍に批判的な研究者でも、国防軍軍人と賄賂、それもヒトラーからの買収という事実についてはこれまでほとんど気がつかなかった、あるいは問題にしてこなかった。

だがその原因が、旧独軍関係者による巧妙な史実の隠蔽や差し替えの結果だったとしたら、これまで流布されてきた国防軍と第二次世界大戦像について

て根本から見直さなければならなくなるだろう。

ここで紹介するのは、今からほんの数年前にドイツでの調査によって明らかになった、ハインツ・グデーリアン以下のドイツ国防軍人たちの、ヒトラーとの奇怪な関係に関する事実である。

「グデーリアンのイメージ」

陸軍上級大将ハインツ・グデーリアン（一八八八―一九五四）は、おそらく元帥エルヴィン・ロンメルとならんで今日でも最も著名なドイツ国防軍軍人だろう。その名声はドイツの敗戦後かえって世界的なものになったとさえいえる。

彼にあたえられる最高の賛辞は「機甲戦術の始祖」というものである。すなわち、一九三九年九月の対ポーランド戦に始まり、特に一九四〇年五月の対西方戦でみずから機甲部隊を指揮して、ドイツ軍の圧勝に最大の貢献をした、いわゆる電撃戦の最大の功労者とされる。

対西方戦の勝利ののち上級大将に昇進したグデーリアンは、次に一九四一年六月に始まる対ソ戦、すなわち「バ

ルバロッサ」作戦において、中央軍集団麾下の第2装甲集団を指揮してモスクワ攻略作戦の最先鋒となった。しかし同年末に、モスクワ攻防戦をめぐるヒトラーと意見対立をきたした結果、退任する。

その後約一年ほど引退生活をおくつたが、一九四三年三月現役に復帰して、装甲兵総監としてスターリングラード戦大敗後のドイツ装甲部隊の再建に尽力する。さらに一九四四年七月二十日、総統大本営「ヴォルフスシャンツェ」でのヒトラー暗殺未遂事件が起こると、爆発のわずか数時間後、ヒトラーによって参謀総長に起用され、主として対ソ戦の作戦指導にあたった。そして終戦間近の一九四五年三月末にヒトラーから「健康上の理由により」辞任させられるまで総長職にあった。

このようなグデーリアンの軍歴を見ると、軍人としては純粹な技術的専門家・戦術家であり、政治とか、いわんやヒトラーとナチスにまつわる暗黒面や犯罪性とはまったく無縁な存在だったと判定できる。その意味ではエルヴィン・ロンメルも同様だろう。

さらにグデーリアンにまつわる後世のイメージを有利なものとしているの

は、彼の「直言居士」としての言動である。たとえ相手が上官だろうと、あるいはヒトラーその人に対してだろうと、自分が正しいと思ったことははずけと、菌に衣着せず直言したとされるグデーリアンの振る舞いは、後世の人間に大きな爽快感をあたえる。それは、多くのドイツ軍人たちがヒトラーの前ではただ沈黙するか、あるいはへつらいとおべっか使いをしていただけとされているからだ。

こうしてハインツ・グデーリアンは戦後一貫して、ヒトラーにさえ桶突くことも辞さない猛将、天才的で純粹な技術主義者、偉大な戦術家として、きわめて明朗かつ肯定的なイメージでとらえられてきた。

「グデーリアンについての疑問」

しかしグデーリアンについては、いまだに答えられていない疑問がある。

一九四一年十二月末、モスクワ攻防戦における作戦指導をめぐる、グデーリアンはヒトラーや上官の中央軍集団総司令官クルーゲ元帥と衝突し、自ら退任を願い出て受理され、その後は一時田舎に引っ込んで静養していたという。では、なぜヒトラーはグデーリ



戦場を視察するグデーリアン。優秀な野戦指揮官であると同時に冷静な理論家としてのグデーリアンの評価は間違いなく正しいが、近年、別の角度からの分析も行われ、その人物像が再検証されている。

アンにこんな“優遇措置”をしたのか、というのが第一の疑問である。

“バルバロッサ”作戦の失敗とモスクワ前面でのソ連側の大反攻でドイツの東部戦線全体が崩壊の危機にみまわれると、ヒトラーは前線の指揮官たちに対する大規模な“肅清”を実施した。

中でも特にひどい例は、北方軍集団麾下の第4装甲集団を指揮したエリッヒ・ヘブナーへの仕打ちである。ヘブナーはグデーリアンの退任とほとんど時を同じくして、わずかな戦線整理のために独断で部隊を後退させたことをヒトラーにとがめられ、軍籍の剥奪と軍服着用禁止という苛酷な処置をうけた。

おなじ陸軍上級大將で、しかも同じ

時に東部戦線で装甲集団の指揮官だったグデーリアンとヘブナーとで、なぜこれほどにもヒトラーの態度に差があるのか。

第二の疑問。田舎に引つ込んで静養していたグデーリアンは、一九四三年三月、スターリングラードでの壊滅後のドイツ装甲部隊の再建のためヒトラーから呼び戻され、装甲兵総監として現役に復帰した。この時の活躍については彼の回顧録に詳しい。だがグデーリアンは、一九四四年七月二十日にヒトラー暗殺未遂事件が起こると、そのわずか数時間後、ヒトラーから参謀総長に任命される。

これがなぜ疑問かといえば、グデーリアンの軍歴でも明らかのように、彼

にはこれまで参謀将校としての経験がなく、当時もこの人事については全軍で驚きをもって迎えられた。では、このヒトラーによる場違いとも思える人事にはどんな背景があったのか。

そして第三の疑問として、グデーリアンが参謀総長の職責を担った結果、大戦末期のドイツの戦争指導にどんな影響があったのか、という点である。

【静養中のグデーリアンの行動】

戦後の回顧録でグデーリアンは、退任してからは地主になるつもりで物件をさがしてみたがうまくいかなかった、とほんのわずかに触れている。ところがこれが実は大変な事なのだ。ここで、最近ようやく明らかになったグデーリアンによる土地取得をめぐる真相の経緯を紹介することで、前に挙げた三つの疑問に答えるヒントとしたい。

以下は、空襲や戦後の混乱から辛うじて保存されたドイツの公文書から明らかになった諸事実の一部である。

一九四二年十月二十六日…ヴァルテラント(戦前はポーランド領だったが、一九三九年九月の勝利によってドイツ本国の一部として編入された)のナチス党大区長アルトゥーア・グラライザ

ーに対して、グデーリアンは“総統は自分に、かつて先祖が所有していたその後ポーランド側に没収(第一次大戦の敗北によってポーランド領となったため)された農場を再びヴァルテラントで購入し、一家がそこに入植できるようにするため、適当な地所をさがすことをグラライザーに委託するよう指示した”と連絡。

一九四二年十月三十日…グラライザーはこのグデーリアンからの要請に基づき、土地購入のための費用捻出の手続きを内閣官房長ハンス・ラマースに依頼。

一九四二年十一月二十五日…ラマースから事の仔細の説明を求められた総統付副官長ルドルフ・シユムント少将は“ずっと前から総統は、もし回復された東方の領土で地所を購入するつもりなら支援する、とグデーリアンに個人的に言明した。というのは、戦前(第一次世界大戦のこと)にグデーリアン家の所有だった農場がその後ポーランドに没収されたことを総統が知ったからである”と回答。

一九四二年十二月三日…ラマースからグラライザーへの連絡として、総統からグデーリアンに交付されるのは下賜

金の形をとるので、ゲデーリアンの希望する農場の広さと状態、価格の査定について協力するよう依頼。

一九四三年五月二十六日…グライザーはラマースに、旧ドイツ領（戦前までの）内にはもはやゲデーリアンが希望するような地所は見当たらないので、新たにドイツ本国に編入された旧ポーランド領のヴァルテラントで見つけるのがよい、と示唆。

このグライザーの連絡によると、ゲデーリアンは夫人やグライザーが派遣した不動産鑑定家の専門家の一団をひきつれて、グライザーから渡された購入の候補となる物件一〇ないし一五か所を見てまわった。その際ゲデーリアンは、森林と農地が混在した良好な土質の農場で、確実に農業収益が期待できる地所を希望したという。

さらにグライザーは続けて、「この視察旅行の終わりに、ゲデーリアンは夫人と息子と一緒に私のもとにやってきて、私が渡した一覧表に載っていない別の農場を候補として挙げた。そこは約七〇〇〇モルゲン（約二三〇〇〇ヘクタール）の広さで、屋敷の状態も良好で、美しい庭があるとのこと」。

しかしこの地所取得についてはSS

長官でドイツ民族性強化全権のハインリッヒ・ヒムラーから横槍がはいって御破算となった。ヒムラーのあげた理由とは、「家族とともにそこに住み着いてドイツ化を強力に推進しようとする意欲もなく、ただ夏の間の住まいとして、あるいは単なる収入源としてしか考えないようでは困る」というものであった。

そこでゲデーリアンは、今度は一九四三年十月に、党官房長としてヒトラーの側近ナンバーにのし上がっていた陰の実力者マルチン・ボルマンに働きかけ、彼から直接、別に自分で探したヴァルテラントにあるポーランド人所有の農場の取得に便宜をはかってもらうよう依頼した。そしてボルマンからラマースに連絡があり、ラマースはゲデーリアンの希望する農場取得に必要な経費として、ヒトラーの裏金から一二四万マルクの内密の支払いの手続きを行い、この金額によってゲデーリアンは一九四四年二月に念願の農場の取得に成功したという。

このゲデーリアンが取得した農場がどんなものだったかというと、「総面積九四七・三八ヘクタール。中に耕地、牧草地、牧場、庭園、果樹園、森林、

湖沼、農家が混在。農場からの一年の収益見込みは一二四万マルク。農場への交通は便利で、畜舎と建物の大半はほぼ目的にかなうよう整備されており、労働者の住居も良好な状態。建物の増改築には四万マルクが必要。母屋は一九一三年ころの建造で、きわめて良好な状態にあり、手入れも行き届き、内部の造作も、決して贅沢というわけではないが、住むのに充分である。この荘園はこの地方で最良の収益をあげるものの一つということができた。」という物件だった。

この荘園は、以前は古いポーランド貴族の所領だったが、一九三九年九月のドイツによる征服によって、ドイツの国有財産として没収されていたのだった。

以上の経過をもっと簡単に整理してみると、ゲデーリアンは農場取得の希望をヒトラーに願ひ出て、ヒトラーから地元の

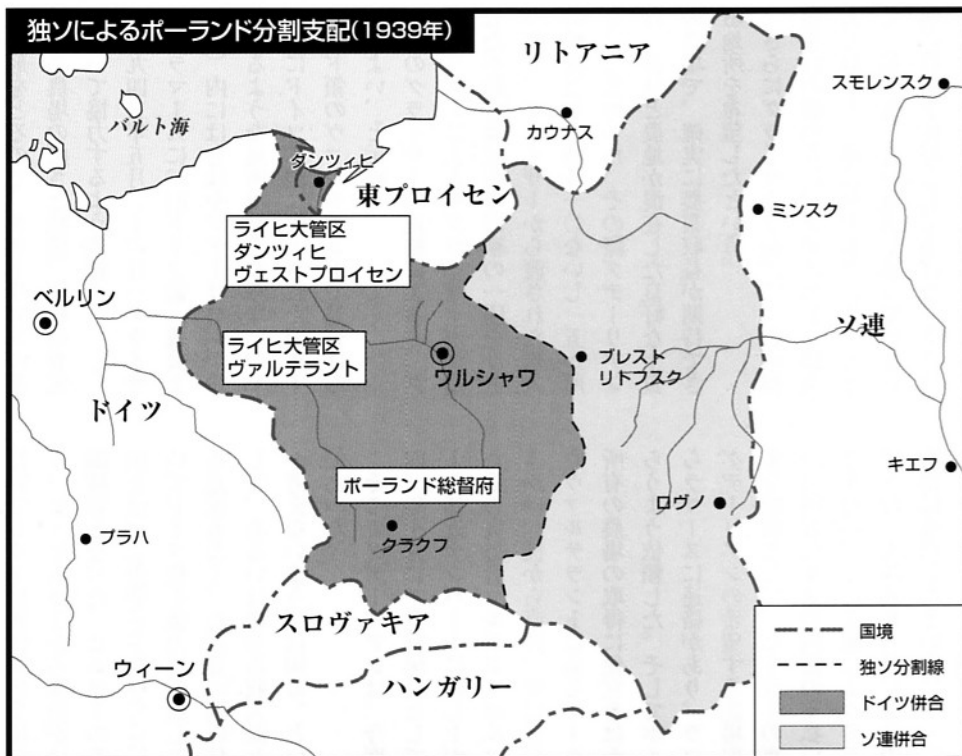
ナチス党幹部にゲデーリアンのために協力するよう指示が出た。そして希望の農場が決まると、国有財産の購入のための代金をヒトラーの裏金から支出することになり、この金によってゲデーリアンは法的に何の問題もなく自分の財産とすることができた。つまり、国有財産の「切り取り」をヒトラーが裏で援助してやったことになる。

ところで、土地購入のためにヒトラーからゲデーリアンに与えられた一二



ヒトラーと話し合うゲデーリアン(右)。1943年に装甲兵総監に任命されたあとに撮影されたもの。ヒトラーに遠慮なく意見を言う「直言居士」というイメージがあるゲデーリアンだが、この2人には隠された密接な関係があったといわれている。

独ソによるポーランド分割支配(1939年)



1939年の対ポーランド戦で勝利したドイツは、ソ連とともにポーランドを分割支配、西側がドイツ、東側がソ連領となった。ポーランド南部はポーランド人が多く、北部はポーランド人とドイツ人が混在していたため、南部をポーランド総督府とし、北部をドイツの領土とした。グデーリアンが取得した農場があるヴァルテラントは、ドイツ・ポーランド国境の近くに位置していた。

四万マルクというのがどれほどの金額かといえば、当時のドイツの通貨はライヒスマルク(RM)といい、戦後の

ドイツマルク(DM)の約一〇倍の価値だった。ドイツがユーロに移行する直前の二〇〇一年末現在の換算率は約

五五〇六〇円である。するとグデーリアンに支払われた金額は現在の邦貨に換算して、単純計算で六億円を下らない額ということになる。

グデーリアンがこんなことをやっていた一九四二年から一九四三年というのは、スターリングラード戦と北アフリカ戦が最高潮に達し、戦局全体が大きく転換する時期である。ヒトラーも難しい作戦指導をかかえて多忙だったはずだし、グデーリアンも装甲兵総監として多忙だったはずである。それなのに裏ではこのように全く私的な関心事にかまけていたのだ。

このグデーリアンによる農場取得については、きわめて興味深い証言がある。それはグデーリアンがすでに参謀総長になったあとの一九四四年十月に、"ドイツ軍最高の名将"と呼ばれる元帥エリッヒ・フォン・マンシュタインとかわした会話である。

「数本のワインによって食後の歓談はくつろいだものになった。

突然マンシュタインがたずねた。

「言ってみろよグデーリアン、聞いているぞ、君がポーゼン(現ポーランド領ポズナニ)に農場を手に入れたことを。君はどうやってそれに成功したの

だ?」

するとグデーリアンは何のためらいもなしに、美しいポーランドの農場のリストをもらったことを語りだした。

そして、何日もかけてそれら全部を見てまわり、最後にその中からふさわしい物件を自分で決めたのだ、とも言った。

びっくりしたマンシュタインは聞き返した、そこにはまだポーランド人の地主が住んでいたのかどうかと。グデーリアンがそれを肯定すると、マンシュタインは、それからどうなったのだ、と聞いた。

グデーリアンは、その後のことは何も知らないが、とにかく農場を受け取った時、もうポーランド人はそこにはいなかった、また彼等がどこに行っただか知らない、と答えた。マンシュタインは絶句して、二、三度顔をぴくりとさせた。それが彼にとって何を意味するか私にはよくわかった。そんなやり方で農場を手に入れるのは彼の流儀に反することだからである。

これはその場に同席したマンシュタインの伝令将校の証言である。実はマンシュタインはこの時すでに退役していたが、やはり地主になるのを希望し

て、グデーリアンの件を聞き、彼のもとを訪ねた時のことだという。

【グデーリアン参謀総長】

このような実情を見れば、グデーリアンは決して「直言居士」などではな



1944年、参謀総長職についた時のグデーリアン。この年の2月には、念願の農場を取得していた。参謀将校としての経験がなかったグデーリアンの参謀総長への就任には、ヒトラーとの密接な関係が垣間見える。

く、ヒトラーの信任がきわめてあつた。「忠臣」あるいは「寵臣」だったことがわかる。しかも領地の給付まであつたとすれば、ヒトラーとの関係はまるで封建時代の主従関係も同然だったとさえ言えるだろう。

すると、前述の一九四四年七月二十日の暗殺未遂事件の直後に、ヒトラーがグデーリアンをただちにクルト・ツァイツラーの後任として、参謀総長に任命

した理由もはつきりする。この時点で陸軍総司令官はヒトラーの兼任だったから、参謀総長としてのグデーリアンは事実上陸軍のトップに立ったことになる。

そして陸軍参謀本部の担当は東部戦

線に限定されていた。ここでヒトラーは、対ソ戦を遂行するにあたり、最も身近な補佐役として、信頼できるグデーリアンを選んだ。それは、多くの参謀将校が反ヒトラー陰謀に加担した疑いがあつたためである。また、それまでドイツ陸軍の人脈の中で主流だった参謀将校出身者とグデーリアンとはむしろ対立的な関係にあつたし、そのことについてはグデーリアンは戦後の回顧録でも隠していない。

こうして陸軍参謀総長となつたグデーリアンは、これから一九四五年三月末までの、ドイツにとって絶望的となる戦局を指導することになる。

【何が問題か？】

ではグデーリアンの参謀総長職の何が問題なのか。

ヒトラー暗殺未遂事件とクーデターの失敗後、この陰謀に連座して逮捕された軍人たちに対する陸軍の「名誉法廷」がひらかれ、そこで逮捕された軍人たちへの軍籍の剥奪と勲功の取り消しが申し渡された。この時グデーリアンは議長ルントシュテット元帥とともにこの法廷の判士を務め、多数の元同僚たちの軍からの追放を決定している

のだ。無論これはヒトラーの意を受けてのことである。

先に挙げたエリッヒ・ヘブナーとグデーリアンの運命は、この事件を境に極端なほど乖離することになる。軍から追放された後のヘブナーは反ヒトラー派の中心人物の一人となり、七月二十日事件発生当日はベルリンでクーデターの指揮を執る予定だった。

しかしヒトラー暗殺の失敗とクーデターの不発によってヘブナーは逮捕される。それから他の主立った陰謀の首謀者たちとともに民族裁判所での「見せ物裁判」にかけられ、裁判長ローラント・フライスラーによって衆人環視の中で散々に愚弄され罵倒された。そして国家反逆罪のかどで死刑を言い渡されても、ヘブナーには拳銃自決や銃殺刑も認められず、民間人への死刑であつたギロチン刑すら適用されなかった。そのかわりに、ピアノ線による絞首刑という非業の最期をとげることになる。

一方、参謀総長となつたグデーリアンの作戦指導は、ただひたすらヒトラーの構想を従順に具体化するだけのものになつてしまふ。暗殺未遂事件で奇跡的に軽傷を負つただけですんだヒト



●大戦中におけるグデーリアンの経歴

1938年	2月4日	陸軍中將に昇進
	3月10日	第16装甲軍団長としてオーストリアに進駐
	10月2日	第16装甲軍団長としてズデーテンラントに進駐
	11月20日	快速兵団長兼快速兵兵監に就任。装甲兵大將に昇進
1939年	8月	第19装甲軍団長に就任
	9月1日	ポーランド侵攻。第19装甲軍団長として参加
1940年	5月10日	西方侵攻作戦。第19装甲軍団長として参加
	6月1日	グデーリアン装甲集団司令官に就任
	7月19日	陸軍上級大將に昇進
	11月16日	第2装甲集団司令官に就任
1941年	6月22日	バルバロッサ作戦。第2装甲集団司令官として参加
	9月30日	タイフーン作戦(モスクワ攻略戦)
	10月5日	第2装甲軍司令官に就任
	12月26日	陸軍総司令部予備役将官に編入
1942年	10月23日	北アフリカでエル・アラメインの戦い
1943年	2月2日	スターリングラードで第6軍降伏
	3月1日	装甲兵総監に就任
	5月7日	連合軍、北アフリカのチュニス占領
	7月5日	ツィタデル作戦(クルスク戦)
1944年	6月6日	連合軍、ノルマンディーに上陸
	6月22日	ソ連の大反攻作戦「バグラチオン」開始。
	7月20日	ヒトラー暗殺未遂事件
	7月21日	陸軍参謀総長に就任(装甲兵総監と兼務)
1945年	8月1日	ワルシャワ蜂起起こる
	12月16日	アルデンヌ攻勢
	3月6日	春の目覚め作戦
	3月28日	開戦
	5月10日	アメリカ軍の捕虜となる

(上の写真) 1944年7月20日に発生した暗殺未遂事件の現場を視察するヒトラー(右)。この事件は彼の参謀本部への不信感を一気に増大させ、これが「忠臣」であるグデーリアンの参謀総長就任につながるようになった。また、表を見ると、農場を探していた1942～43年はドイツ軍にとって致命的な敗北が重なっていた時期であることがわかる。

の結果といえよう。

こうしてグデーリアンは、たとえばヒトラーとナチス体制の犯罪的な面へのかかわりはなくても、戦争末期のヒトラーによる無謀で狂信的な作戦指導に協力して無用の大損害を出してしまったという軍事上の責任は免れない。さらに、ヒトラーの恩顧に甘えて、ナチス党組織を利用してポーランド地主を追いつめ、みずからその農場主におさまってしまったという道義的責任も免れることはできないだろう。

「グデーリアンだけの問題か？」

実は国有地購入の代金をヒトラーに払ってもらったのは、グデーリアンだけにかぎらなかつた。彼以外に現在判明している著名な軍人としては、第一次大戦時の軍人として著名なルーデンドルフ家の子孫、OKW総監カイテル元帥、装甲部隊指揮官エヴァルト・フオン・クライスト元帥などがある。

五年三月のハンガリーでの「春の目覚め」作戦だったが、結果は無残なものとなった。それどころか、東部戦線の正面であるポーランド全土がソ連軍に制圧されるのを許す結果となった。さすがにここで疲れ切ったグデーリアンに対して、ヒトラーは休暇を与えて解放したのである。

ここに一つの冷徹な統計数字がある。ドイツ国防軍の一日当たりの戦死者数

・一九三九年九月一日(対ポーランド

戦開始) から一九四四年七月二十日(ヒトラー暗殺未遂事件)まで…一五八八人。
・一九四四年七月二十一日から一九四五年五月六日(終戦)まで…一万六六四一人。
ヒトラー暗殺未遂事件を境にして、ドイツ側の人的損害はそれ以前の一〇倍にはねあがっていることがわかる。それは最後の大逆転劇を夢見るヒトラーの妄想と、それにただひたすら追従して実行したグデーリアンの作戦指導

ラーは自分への「神慮」を確信するようになり、ドイツの戦局挽回をもたらしすべき奇跡の到来を妄信して、ますます無謀な戦争指導にのめりこんでゆく。その手始めは全く無用なワルシャワ蜂起鎮圧作戦だった。さらに直接の担当戦域ではないが、ヒトラーによる西方での最後の無謀な大博打であるアルデンヌ攻勢にグデーリアンは追従させられてしまう。

グデーリアンがヒトラーの強要に従って実施した最後の大作戦は、一九四



ヒトラーには切手の肖像権という収入源があった。これによる収入は莫大であり、一部は党幹部や軍人などの有力者への賄賂として流された。写真の切手は、左から順番に1941年発行の普通切手、1939年発行の同年ナチス党大会記念切手、1939年発行のヒトラー50歳記念切手、1940年発行の同51歳記念切手。

これ以外にも、誕生祝いや勤続祝いの名目で、ヒトラーから高額現金が小切手の形で軍人たちに内密に贈与されていた。その金額は元帥の場合、最低二五万マルクであり、これは現在の

邦貨換算で約一億円以上になる。

国防軍だけでなく、武装SSの将官たち、たとえばゼップ・ディートリッヒやクルト・タリユーゲなどもこの恩恵に浴した。

この他ヒトラーから、金製のシガレット・ケースやサイン入りの肖像写真といった単なる記念品ではなく、高額の現金や農場の払い下げを受けていたのは閣僚や党幹部、高級官僚、さらには芸術家や作家、スポーツ選手にまでおよんでいる。しかもそのほとんど全部が、免税措置をほどこされての上でのだ。

ヒトラーには個人的に秘密の収入源があった。それは御用写真師ハインリッヒ・ホフマンが撮影したヒトラーの肖像写真が郵便切手の図案として使用されると、普通、記念にかかわらず額面価値の一パーセントが肖像権使用料としてヒトラーの収入になるというくらいりがあったのである。

このおかげでヒトラーは、最大で年収が四〇〇〇万マルクに達した年もあったという。これは邦貨換算でおよそ二〇〇億円に相当する。するとヒトラーにしてみれば二五万マルクなど、はした金にすぎなかっただろうし、また

それによって軍人その他のナチス・エリートたちの忠誠をつないでおくことができたとするれば、それは安い買い物だったということになろう。

そして、この秘密のヒトラーの個人収入の管理にあたったのが、グデーリアンの件で名前が登場した内閣官房長ラマースと副官長のシュムントだった。それでもグデーリアンの得た所領は戦後にポーランド領となったため、彼の農場主としての土地所有は一時はかない夢と消えた。

しかし、ドイツ国内での所領獲得に成功した者は戦後も依然として土地を保有しているという。その極端な例として、「バルバロッサ」作戦で北方軍集団総司令官としてレニングラード攻略を担当し、その後ヒトラーと意見の対立をきたしてみずから退任した元帥リッター・フォン・レーブの場合がある。引退後、やはりグデーリアンと同じように、ヒトラーに地所購入を願い出て代金を交付され、バイエルン州の公有地二一ヘクタールの地主になった。

戦後になってレーブは、国家元首による国法上の行為として代金を交付されたのだから自分は決してナチス国家からの受益者ではない、との呆れ果て

た言い訳をしている。そして、一九九八年にドイツのテレビ局のインタビューに対してレーブ家の子孫は、これからも土地をバイエルン州に返す意思はない、と断言したという。

かつてドイツの軍人たちは「見えるより多くあれ」「見返りよりも奉仕を」ということをモットーにしていた。そこでは英米流儀の正当な報酬を求めるプロフェッショナルリズムは否定され、ただひたすら国に対する無私無欲の奉仕の精神によって職務を遂行するのが理想とされた。これはドイツ、特にプロイセンの軍人に根強くあるキリスト教の倫理観に基づくものと言ってもよい。ゆえに、ゲーリングなどのナチス幹部の腐敗に憤激して、反ヒトラー抵抗派に加わった軍人も多い。

それなのに、グデーリアン以下ドイツ国防軍の主流をなした多くの著名な高級軍人たちが、いわばヒトラーに「ねだる」「あるいはもつと悪くいえば」「たかる」ようにして、国有財産を私物化していたという事実は、これまで当然のように流布してきたドイツ軍人にまつわる「清廉潔白」のイメージを、根本から見直すことを求めているようである。